

「ほかの安息日に」（ルカによる福音書六章六〜一一節）

1 ほかの安息日に

「ほかの安息日に」と今日の箇所は始まっています。私どもが前にしているのは先週に引きつづいて安息日の出来事です。

また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた（六節）。

先週の箇所は、イエスの弟子たちの安息日の行動を巡って、イエスご自身と「ファリサイ派のある人々」とのあいだで非難と反論の応酬があり、「人の子は安息日の主である」というイエスの言葉で終わっていました。つまり対立したまま終わっていたのです。

この日も安息日です。いま会堂に入っていくイエスのお気持ちの中に、そうした対立のことはあったのでしょうか、なかったのでしょうか、分かりませんが、たとえそこに、またふたたび、そうした人たちからの、いわば言いがかりのようなものが予想されるとしても（四・二八〜二九）、そのことで、新たな安息日、イエスが会堂に向かわないことはないのです。

安息日とは、イスラエルの民がみな仕事を休んで、彼らの神、主を礼拝する祝いの日のことです。

何よりそこでは律法、すなわち、神の言葉が朗読されます。そして説き明かされます。その神の言葉を聞くために人々は集まってくるのです。安息日には、そのように集まって、自分たちが、神によって選ばれた、救いの神に導かれて歩む民であることを明らかにします。

一人のイスラエル人イエスも、安息日に会堂に来ます。しかし彼はたんに神の言葉を聞くためにだけそこに来るわけではありません。彼は語るために来ます。教えるために来ます。私どもはイエスの宣教が郷里ガリラヤの会堂での礼拝から始まったことを知っています（四・一六）。そしてそこに集まっていた人々がみな、その口から出る恵みの言葉、権威ある言葉に感嘆したことも知っています（四・二二、三二）。この日もイエスは会堂で教えておられました。そしてそこに、手の不自由な一人の人がいたのです。

さて先週、今日とつづけて、イエスが安息日に会堂に赴いたことを取り上げることになりましたが、イエスの働きが会堂に限られたものでないことは、言うまでもないことです。

会堂は確かにユダヤ人社会の中心にありました。礼拝だけではない、裁判も、教育もそこで行われていたのです。ただしかし掟によって出入りの認められない人もいたのです。徴税人や罪人と呼ばれた人たちがそれです。あるいは、らい病の人も、そもそも町の中に住むことも禁じられています（レビ一三・四六）。そうした共同体の外に置かれた人もイエスの福音から、神の国の福音の宣教から、はずれていたわけでは

ありません。それは福音書が伝えている通りです。

いまは会堂の中でのことです。そこに右手の不自由な一人の男がいました。『ヘブル人福音書』という、新約聖書の少し後に書かれた、関連する文書（新約外典）の中に、この男のことが出てきます。それによると、彼は、「私は手を使う生活をしていない石大工です。イエスよ、私の身体を直して、卑しく食物を乞わなくてよいようにしてください」と助けを求めています。とくに右手が萎えていたということは、利き手が使えず、働くことができない、物乞いをしなければならぬ、卑屈な思いをもって暮さなければならぬ、それが彼の現状でした。今日の箇所には、この男のそうした生活やその思いまでは書いてありません。しかし萎えた手をイエスなら直してくれるかも知れない、心の深いところでは、彼はそう願っていたのです。

2 いやし

ここで起こっていることは、話としては、難しくないのですが、イエスによる片手の萎えた男のいやしと、イエスに敵対していた人たち、律法学者たち及びファリサイ派の人たちとのやりとりが、からみ合っているところが、少し分りにくいところです。片手の萎えた男のいやしをまずたどって、敵対者との関係は、その後で見てみたいと思います。

さて会堂に入ったイエスの目に真先に飛び込んできたのは間違いなく片手の萎えた男のこと、彼のかかえている困窮でした。イエスの眼差しの中に、彼ははじめからとらえられていたのです。

ところで旧約聖書には安息日に病気を直していけないとは書いてありません。しかし当時のユダヤ教の教えでは、安息日にいやすことができるのは、命の危険のあるときに限るとされてきました。そうでないときは、医療行為をしてはならないと、決められていたのです。命の危険をどう判断するかという問題はあるものの、安息日を大事に考えるとすれば、このような定めは大方の納得のいくものと受け入れられていたようです。ですから会堂にいた他の人たちも、右手の不自由な男について、心で同情しても、それ以上に行くことはありませんでした。つまり彼を、いまずぐ手当されるべき人とは見ていなかったということです。片手が不自由というだけではとくに命が危ないとはいえないと。

確かにそう考えるほうが常識的であるかも知れませんが、しかし片手が不自由だということが命に関わらないことだという判断は、だれがしているのでしょうか。その基準はどこにあるのでしょうか。

そんなものほどこにもありません。むしろ私どもは、そのようにして、いわば「常識」に覆われて、他の人の置かれていた状況が見えなくなっている、その中で暮らさざるをえない人の気持ち分らなくなっているということがあるのではないかと思えます。あるところ以上に踏み込むことをしない、無関心に通り過ぎていくというのが現実なのです。

しかしイエスはこの男をいやされます。このことは、何よりもイエスが、彼の右手が不自由だということを、彼にとって命に関わることだと見たということです。その

ように一番深いところで受けとめてくださった。人知れず悩みの中にある、人知れず困窮の中にある、そのことにイエスは目を留め、同情し、いやし、新たな力において生かしてくださいということです。神は私よりも私に近い、そんな言い方をする人もいます。自分でも思ってもみなかった心の願いを聞き届けてくださった、そこに示された深い同情、そこにイエスによるこの男のいやしの本当の意味があったように思います。

先ほど少し申し上げたように、今日の箇所は、イエスによる男のいやしが、すんなり行われたのではないことを伝えていきます。

律法学者たちやファリサイ派の人びとは、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。そこでイエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか」。そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった（七〇一〇節）。

ここのところ、私もは、こんなふうを考えていないでしょうか。つまり、イエスは、「律法学者たちとファリサイ派の人たち」をやっつけるために、安息日にいやしではならないという彼らの考えを論駁するために、この男をいやされたのだというように、です。

しかしその順序は正しくないと思います。この男のいやしのことを、イエスははじめから考えておられた。それが第一のことです。そしていやしがなされようとしたとき、それを阻む、快く思わない者たち、律法学者たちファリサイ派の人たちの悪意が、あらわにされたのです。

その彼らの悪意とは、安息日にいやしてはならないという、人間の定めた決まりを盾に、人を見るその見方です。その決まりを、いわば絶対的なものとしたとき、彼らの目から生身の人間が見えなくなってしまう。片手が不自由でも、命に関わることではないとする感覚、そこに顔を出している非人間性が、イエスによってあぶりだされたのです。

3 イエスの問い

さて律法学者たちやファリサイ派の人びとに対するイエスの問いを、改めて取り上げたいと思います。

そこでイエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか」（九節）。

このイエスの問いそのものの中に、律法学者、ファリサイ派の人たちのそれと大きな違い、決定的ともいえる違いがあります。それは、律法学者、ファリサイ派の人たちが、いつも「安息日に律法で許されていない」こと、してならないことを、問うているのに対して、イエスは、「安息日に律法で許されている」ことを問うていることです。

この違いは大きいのです。皆さんよくご存じのことです。創世記第三章、へびと女（エバ）とのやりとりです。へびは、女にこう問いかけます。「園の木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」。こう問われた女の気持ちは、食べてはいけないと、どの木のことを神は言われたのだろうか、そこに集中します。そしてこう言うのです。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました」（三・二三）。詳しいことは申し上げません。女は「してならない」ことに気をとられて「してよいこと」をすっかり忘れてしまったということです。

ここでも同じことが起こっています。律法学者もファリサイ派の人も、してならないことに気をとられ、他人（ひと）を裁き、自分を正当化するだけで、安息日に許されていることへの積極的な関心を失っています。

ルカによる福音書第一四章に、このことと同じような問題が起こって、イエスが、息子でも牛でも、井戸に落ちたとき、安息日だからといって助けられない人はいないではないかと問いかけているところがあります。そしてその時、ファリサイ派は答えられなかったとあります（一四・五、六）。命に関わる場合には、安息日でも、人を助けてよい、律法学者もファリサイ派も、むしろよく知っていたことです。しかしそれを彼らは例外と考えていました。安息日にしてならないことだけ考えていたからです。そこから見れば、なるほど例外かも知れません。しかし、イエスのように、安息日に許されていること、というところから考えれば、人を助けることは、例外ではなく、それこそが、本来のことなのです。本来のこととは、善を行うことであり、命を救うことなのです。

しかしそれだけではないように思います。つまり、善を行うこと、悪を行わないこと、命を救うこと、滅ぼさないこと、これはただだんに、安息日に律法で許されているというだけでなく、安息日にこそ、なされなければならぬ、ふさわしい行為、神の御心にかなうことだとイエスは言っているのです。

安息日は、これは先週も少し申し上げましたが、第七日目、完成の日、救いの日であり、人間の解放の日（申命記五・一五）、栄光の日、祝祭日です。命を救う、善を行う、それこそが相応しい時なのです。それゆえイエスもまた、ここで右手の萎えた男に「手を伸ばしなさい」と命じ、この言葉によつていやし、新しい命に生きることを許したのです。この恵みと救いが安息日を支配しなければなりません。イエスこそ安息日の主なのですから。